

EPILOGUEにおけるモダニスト批評とその理論的限界

園井, 英秀

<https://doi.org/10.15017/2559303>

出版情報 : 文學研究. 93, pp.1-19, 1996-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

EPILOGUEにおけるモダニスト批評と その理論的限界

園 井 英 秀

(1)

In that exercise in the *Survey*: we were defending the integrity of texts against criticism...we meant to establish by versification of the text the reality which a poem may have apart from its social reality—a reality by which it is inviolable.¹

この言明は*A Survey fo Modernist Poetry* (1927) におけるシェイクスピアソネットの文体分析の場面に言及し、その批評態度を自ら修正するものであるのみならず、*Epilogue* (1935-38) の基本的批評原理が文学作品の「社会的現実」ではなく作品自体の「固有の現実」にのみ関わることを示唆する。この主張はローラ・ライディングの批評理論を直接反映するといつてよい。ライディング思想の中心的メッセージは究極的には、詩が真実を「顕現せしめる」ものであり「真実以外の名は詩に相応しくない」² という単純な仮定に収斂する。*Epilogue* のメルクマルもこの意味における統一性を保ち、それは同時に1920年代から30年代におけるモダニスト理論と共通する認識を示す。ではなぜ、この本質的に単純なメッセージがグレイヴズ／ライディングの批評において複雑かつ難解な様相を呈するのか。それはこの批評原理が妥協を排した純粋な実践

(praxis) を要求し、その達成の困難さを予測させることによるからである。換言すれば、この実践は捨象と否定によって成立する排他的特質を内包する。詩が真実として成立することを妨げるすべてのものを厳密に除外するという意味においては、真実の「感情的解釈」としての観念はその「歴史的統合性」³故に詩的価値は無く否定される。この排他的批評原理を仮に純純原理と呼ぶことができるとすれば、詩作は常にこの純粋性を達成することであり、批評はすべての思潮や時代の歴史的感覚を超越することであると仮定される。この仮定はある意味では不完全な詩作、あるいは詩作の究極的不可能性を示唆し得る。グレイヴス／ライディングの批評が*Epilogue*においてその原理的極点における独自性と共に批評の限界を露呈することはモダニスト理論の弱点を示唆するともいえる。

ランボー (Arthur Rimbaud) の芸術的限界についての解釈はこの意味で同時に解釈の限界を示す。ランボーの芸術的特質を、その失敗の感覚に見出そうとする仮定は、確かに詩の純粋性を逆説的な文脈において証明し得るとする主張の一つのパラゴンとなり得ている。ランボーの芸術性が現実の偶発的 (従って非芸術的) 瞬間と詩作の必然的瞬間との葛藤を内包する不安定な状況に存するとすれば、それは常に創作行為における挫折の予感を意味する。これはむしろランボーの典型的な状況であるというべきである。この状況がライディング詩作理論のプラクシスにおける現実的場面を反映する。即ち、それは、詩が究極的な純粋性を保持すべきであるという絶対的なテーゼとそれが究極の純粋性を保持し得ない人間的能力によっては達成不可能であるという二律背反として現出する。グレイヴス／ライディングはこの実際の批評の行き詰りをどのように解決するか。*Epilogue*においてはランボーの芸術的挫折は通常の意味における失敗やマネリズムとは異なる知的かつ創造的無力感であると規定される。これは確かにフランス象徴詩固有のデカダンスの感覚を是認する主張にあると解釈し得る。しかしグレイヴス／ライディングのランボーに対する評価は、いわば、詩作の究極的不可能性を認識する詩作行為における積極的プロセスの意

義を評価するものであり、デカダンスの受動的感覚を示すものではない。ランボオの作品が常に創造的であり得るのはこの理由による。むしろ、その創造性は芸術的な「最終的不毛性」を常に認識することにある。

Rimbaud's poems were painstakingly 'creative'; they were contrived to make actual the neglected range of experience between the two immediacies [*i.e.* the casual human moment and the conclusive moment]-the intellectual desert where the spiritually sensitive but spiritually impotent mind lost itself.⁴

不毛性は現実的には言語的制限として認識される。詩の言語は常にことば本来の「原始性」(“primitiveness”)を維持するために歴史的影響を捨象し続けるものでなければならない。詩人の役割は一にこの任務に関わるものである。モダニスト詩における言語観は本質的にこの純粋性を追求するものである。

Language...had to be reorganized, used as is afresh, cleansed of its experience: to be as 'pure' and 'abstract' as colour or stone. Words had to be reduced to their least historical value; the purer they could be made, the more eternally immediate and present they would be.⁵

詩が究極的には芸術的に「純化された空間」(“a purified universe”)⁶を創造するものとする仮定は、その非現実的抽象性の故に必然的に詩作行為の不可能性を示唆する。ランボオの挫折は、この意味において逆説的にその芸術的眞正を証明し、同様の理由によって1939年のライディングの詩作の中断が起る。即ち、この両者における詩作の頓座は、芸術的目的としての詩の純粋性を追求する過程に必然の到達点と解釈される。(“...truth begins where poetry

ends.”)⁷ ライディングにおいては、詩の純粋性は詩的創造行為の中断という逸説によってのみ証明されるとする理論の厳密さを内包する。モダニスト理論においてはこの厳密さは達成されることはない。モダニスト詩における純粋性の追求は、*Epilogue*におけると同様、歴史的価値に対する否定ないしは超越的姿勢によって典型的に強調されるが、それは同時に歴史的価値に代わる何らかの審美的価値の存在を常に予測させる。例えば、モダニスト文学における神話的要素の重要な側面はその「超時間的性質」(“a-temporality”)⁸にあり、神話の審美的創造は歴史的サイクルを超越することによってその真の意義を全うする。神話はこの場合歴史的価値の代用というよりその反テーゼとしての価値を有する。*Epilogue*の理論においては歴史的意識は純粋性の対立概念として捨象されその代用が求められることはない。むしろ純粋性の等価物をすべて否定することによってその究極的価値を強調する。純粋原理はこの意味で否定的、閉鎖的創作理論である。言いかえれば、詩の芸術的特質は思潮的、審美的、感情的価値の否定の上に成立し、それ自体の自己充足的完全性を主張することの外にはない。モダニズムにおける閉鎖性は、同様に排他的ではあるが、必然的に象徴主義的審美性を保持する。その文学的コズモスは特殊な構造によって成り立ち、例えば、*The Waste Land* (1922) や *To the Lighthouse* (1927) におけるように、作品のコズモスにおける内部充足的完全性は保ちながら、そこには一定の審美的、感情的価値が存在することは明らかである。

Damyata: the boat responded

Gaily, to the hand expert with sail and oar

The sea was calm, your heart would have responded

Gaily, when invited, beating obedient

To controlling hands...

(“What the Thunder said”)⁹

この文脈に典型的に見られるように *The Waste Land* における肯定的価値は作品の審美性を支える象徴の普遍性によって持たせられる。「荒地」は特殊な詩的空間を表象するのではなく、文明と人間性の荒廃という主題の普遍的意味を強調する。それはむしろ強調され過ぎるとさえいえる。荒廃に対する救済は予測され、予測されたとおりの形でそれは暗示される。それは東洋的、仏教的叡智のエクセントリックな包容力ではなく、苛酷な精神的遍歴の後に期待される安寧と救いのイメージである。*The Waste Land* のモダニスト作品としての詩的インパクトは、詩の脱日常的、超時間的空間における詩的メッセージの目まぐるしい混濁によって伝えられ、かつそれは読者の特権的な知的理解力に依存する。しかしこの排他性は詩の主題と象徴の一般的意味によって否定的ニュアンスを失う。

I sat upon the shore

Fishing, with the arid plain behind me

Shall I at least set my lands in order?

(ibid.)

イギリス文学におけるモダニスト作品はこの意味においては、しばしば自己閉鎖的ではなく、ある解放性を内包する。

To the Lighthouse におけるいわゆる「内的独白」(interior monologue) は作品の心理的特質だけでなく、時間という文学的主题についての特殊な叙述のモードを示唆する。即ち、それは明らかにプルースト (Marcel Proust) の *A la recherche du temps perdu* (1913-27) における叙述のスタイルを意識したものであり、ウルフ (Virginia Woolf) はその技法を自らの作品における心理的年代記の基本的調子として一貫させたと考えられる。*To the Lighthouse* においては作品は (そしてこの意味においてプルーストと同様に) 失われた時間的価値が人間の意識においていかに回復され得るかという主題に

関わる。三部に分かれた小説の中間部を成す“Time Passes”は最も短いセクションでありながら（この点においては、第一部“The Window”が小説の大半を構成しながらその全体のアクションが1日以内に起こることと対照的であるが）、10年間の年月をカバーする。この部分で、いわば挿入句的に言及されるいくつかの死のモチーフは、失われた時の回復不可能性に対する感傷を否定するものではなく、過去は瞬間的ヴィジョンとして現在の意識において回復され得ることを暗示する。失われた時の回復、あるいは時間の推移における肯定的価値の存在は、自然界の生命のサイクルと「燈台」の光によって示唆される。

And now in the heat of summer the wind sent its spies about the house again. Flies wove a web in the sunny rooms; weeds that had grown close to the glass in the night tapped methodically at the window pane. When darkness fell, the stroke of the Lighthouse ...tracing its pattern, came now in the softer light of spring mixed with moonlight gliding gently as if it had laid its caress and lingered stealthily and looked and came lovingly again.¹⁰

ウルフやジョイス（James Joyce）におけるモダニスト文学の手法としての「意識の流れ」は時間に対する相対的把握を可能にする接近であり、それによって時間的価値が必ずしも歴史的価値として固定化するものではないことを強調する技法と考えることができる。燈台の光が、月光と相まって繰り返して照らし出すものは、いわば、暗闇から甦える過去である。この意味で時間的価値の絶対性は消滅し回復の可能性を暗示する。この感覚は、イギリス文学におけるモダニズムの包括性あるいは反アナキスト的特質を示唆するものである。

*Epilogue*におけるライディングの思想はこの意味ではアナキックな姿勢を内包する。詩作における純粹原理は、詩の純粹性、即ち、真実を除けば、審美的、歴史的価値を一切捨象するものである。

Truth is not beautiful, poems are not beautiful. Beauty is the quality of seeming true in time, the quality of imitative completeness.¹¹

詩の純粹性をその代用的価値と峻別して示すことは*Epilogue*の基本的戦術である。それはいわば代用的価値の誤謬を指摘して真の詩的価値を「抽出」(“distil”)するという手法にある。詩は常に客観的経験を抽象化して「恒久的の全体性」(“the everlasting wholeness”)を保持する。この価値は時間的影響を超越するが故に一定でオリジナルである。一方、通常詩的価値と理解される審美的価値は歴史的影響を免れ得ないが故に恒久的全体性の部分的模倣に過ぎない。この仮定は少くとも*Epilogue*における批評的判断が芸術的価値の真偽の区別に関わること、さらに、論点が歴史的価値と永遠性ないしは純粹性ととの峻別に集中するという意味では、モダニスト理論のディスコースとして解釈し得る。*Epilogue*以降のライディングの批評意識はグレイヴズとの距離を認識せざるを得ず、その芸術的エリティストのスタンスは先鋭化する。この場合、詩の純粹性を強調することはモダニズム文学の反社会的、排他的テーゼの論理的強靱さとある種の妥当性を共有するといえる。マヨルカのライディングはエリティズムの頂点の存在としてその特権的立場を明らかにする。

We, the inside people, have in us an immediate power of truth, by virtue of which we can clarify the real, the morally compatible outside world...¹²

ライディングにおいては純粹原理によって支配される「内的存在」の価値は唯一絶対であり、外的事象はすべて時間に支配される歴史的価値を有するに過ぎない。ライディング思想の論理性は真の詩的価値と区別されるものが例外なく詩の近似的価値をすべて除外することにおいて成立する。従って散文あるい

は批評それ自体もその審美的価値、道徳的価値の如何に拘わらず所詮芸術的統合性、あるいは（ライディングの用語に従えば）芸術作品の恒久的全体性を達成し得るものではない。

The poet uses poetry, the language of identity; the critic uses prose, the language of differentiation....Prose is the language of difference, as poetic expression is the language of unity.¹³

即ち、批評の言語は本質的に置換不可能である詩的価値を散文によって現実的価値に「翻訳」しようとする試みでありその意味で詩的価値の近似的表現を超えることはない。批評が、かく、それ自体の「同一性」（identity）と「統合性」（unity）を保有し得ないとする主張はライディングの論理においては完全に正当な指摘である。*Epilogue*の文脈においては批評（あるいはその言語）は変化と流動性に支配されるという意味では歴史的価値を脱却し得るものではない。言い換えれば、批評は歴史的価値を再生する作業以上の営為ではない。

A work that invites criticism is an exercise in history... it is the creation of old staff.¹⁴

批評に対するこの位置付けは1920年代におけるモダニスト批評の旗手としてのT.S.エリオットの立場と基本的に異なる。T.S.エリオットは、マシュー・アーノルドの批評の限界を指摘することによって批評が創作（詩作）と同列の機能を果たすことを主張する。

Mattew Arnold distinguishes far too bluntly, it seems to me, between the two activities: he overlooks the capital importance of criticism in the work of creation itself.¹⁵

モダニスト批評におけるこのプロトコルは、一方では詩の独立性を主張し、また、批評は現実には詩よりも優越的な存在ではあり得ないとするパラドックスを解決することができない。事実、エリオット自身、1956年に『批評の限界』において1923年のメッセージの修正を行う。ここでは、批評の機能は読者を真の理解に導かず、時に「詩的であるものとは異なる方向」¹⁶へ向ける危険性さえ指摘される。この変化ははからずもモダニズムが内包する矛盾を露呈するものである。危険性とはライディングの文脈においては、詩の真の価値とは異なる審美的、歴史的価値によって作品を判断する批評機能の本質的な弱点である。批評はこの意味において常に「詩的中心」¹⁷から後退する。*Epilogue*における歴史的価値の捨象は批評の限界を指摘する文脈においてエリオットの修正と対照的な明快さを有する。

モダニズムと歴史性との関係は常にある矛盾を内包する。パウンド、エリオット、ジョイスの文学的スタンスは芸術の純粋性あるいは超時間的価値を強調するものでありながら、実作においては基本的には歴史的価値は是認され、文学的テーマはその現在の意味を問うものである。エリオットの*Tradition and the Individual Talent* (1919) の中心的テーゼは、この意味においてモダニストのパラドックスを理論的に予測するといえる。この文脈におけるエリオットの歴史観はいわば超時間的で常にその同時代性、現在性を強調するものである。詩は歴史性と不可分であり、創造と歴史性への帰属はほぼ同質である。*The Waste Land*の手法はこの矛盾を解決するように見える。それは主題に含有される歴史的価値が直接的ではなく、比喩あるいは寓意によって伝えられるためである。言いかえれば、歴史性は詩的価値創造のプロセスにすでに認知されたものとして理解される。従って、作品の過去との同時代性は、芸術的環境の空間的同一性、即ちモダニストのいわゆる「文学的国際性」(“the literary internationalism”)¹⁸と同様の思想として把握される。*Epilogue*の思想においては歴史性や文明は寓意やパロディによって置換されることはあり得ず、その価値は詩的価値を保有し得ない。これをモダニズムの弱点とする認識は一貫

する。

Modernism...should describe a quality in poetry which has nothing to do with the date or with responding to civilization.¹⁹

ライディングとエリオット理論の最大の差異は歴史的価値に対する態度によって決定される。エリオットに歴史性概念の導入がなければ両者の距離はほとんど無いといってよい。モダニスト理論の根幹は詩の純粹性の主張にある。それではなぜエリオットは矛盾を予測しつつ、その理論に歴史性の導入を行ったか。それは、エリオットによる20世紀文学における新しい古典主義の創造の意欲と無関係ではない。モダニズムは基本的に、ロマンティシズムの感覚に反発する反個人主義的ないし古典主義的姿勢を持つ。ロマンティシズムに対するモダニストの反動的態度はその個人的恣意性に対するものである。古典的感覚がそれに反しある種の均一性を示唆するとすればそれは近代的自我の発現を抑制することになる。さらにこの均一性は歴史との調和を前提とする特質である。エリオットはこれら二つの特質がモダニズム感覚と矛盾するにも拘らずそれを敢えて自らの理論となし、それによってモダニスト思想の渊源としてのフランス象徴主義を修正する意図を示したといってよい。その結果エリオット理論において強調される論点が歴史性の認識と個性の滅却である。

What happens is a continual surrender of himself.... The progress of an artist is a continual self-sacrifice, a continual extinction of personality.²⁰

ライディングが「不可能な仕事」²¹と呼ぶモダニストの矛盾はエリオットの理論とそのプラクシスにおける創作意識との現実的差異を示唆する。事実エリオットは、理論においては歴史性の獲得、個性の間断ない滅却という古典的特質を

強調する一方で、実作においては極めて個性的な詩的世界を創造することを試み、この矛盾を解決しようとする姿勢を示すことはない。*Epilogue*においてモダニスト詩の「独創性」に存する弱点が指摘される場合はモダニスト詩における矛盾が未解決であることを主張するものである。

The most serious flaw in poetic modernism has been its attachment to originality. The modernist poet has not been able to forsake originality however directly it might contradict the classical idea of discipline...²²

(2)

*Epilogue*を中心とするグレイヴズ／ライディングの批評意識においては純粹原理の主張と共に一定の妥協的調子が存在することも指摘し得る。この調子は、批評が道徳的ないし教育的文脈に関与せざるを得ない場合に生じる。*Epilogue*の特権的、芸術的立場は、「外的世界」の非特権的、一般的価値を予測するが故に、教育的道徳的調子を全面的に失うことはない。論理的には外的世界の存在を認識することによって*Epilogue*の内的世界の原理が真の意味を持つ。純粹原理において道徳的価値は詩的価値とはなり得ない。しかし*Epilogue*においては善は詩的真實の道徳的等価物であるという発見が示される。真實としての詩的価値は批評的価値においては善として認識される。この文脈においては詩的真實に対する批評的追求は善の追求と見なし得るアスペクトを有する。

The critical aspect of value is to the poetic aspect of value as goodness is to truth. The critic must discover in poems, demonstrate by poems, goodness...²³

*Epilogue*批評の閉鎖的価値観において善の追求という道徳的姿勢は例外的な認識と仮定すべきか。善の確認はイギリス詩の感覚において、詩作の最も基本的な立場であり、その道徳的性質を支える基本的概念である。詩は善の達成を常に予測し、その機能は必然的に道徳的性質を有する。グレイブズ/ライディングがその批評原理に善の概念を導入したことはグレイブ自身の詩に対する先験的価値観としてのみならずそれをイギリス詩の根幹の精神と見なす事実をあえて否定し得なかったためであると考えてよい。ライディング批評においては善と詩との関係に対する洞察は、特に1980年代において概念的にも理論的にも独自の展開を示すが、*Epilogue*においては詩的真実と善の関係はある典型的な論理的トリックによって是認される。即ち、善は本質的に詩的真実ではあり得ないが、詩的真実が現実的＝歴史的＝批評的文脈において解釈される場合にその意味を持つとする仮定である。

...the critic must depend on historical criteria for the language of criticism, and the comparison he makes is not between the good and the true but between historical truth and poetic truth...²⁴

即ち、善は詩的真実とは異なる歴史的眞実である。歴史的眞実は、詩的真実を「人間的用語」において「劇化」し、「矮少化」したものであり、詩的真実と感傷的なコントラストを成すものとして是認される。*Epilogue* I (1935)における善の概念の導入が究極的にはこの歯切れの悪さを脱し得ないのは詩的価値としての善を道徳的価値としての善と区別し得るか否かについての判断が曖昧であるからである。*Epilogue* III (1938)においてこの焦燥は表面化する。

Let it be said as clearly as possible that the goodness of poetry is not moral goodness.²⁵

「詩的善」は明らかに「詩的真実」と同意であるが善の概念的意味はすでに持ち得ず実態を把握し難い抽象的概念である。詩的善は「詩的真実への意志」²⁶であり、唯一の「思想的善」であれば、それが道徳的価値を有する善の概念とは区別され得るにせよ、詩的真実の性質を示すために、そもそもなぜ善の概念が言及されねばならないのか。道徳的善は明確に否定される。

It [the goodness of poets and of poetry] is only practically demonstrable in poems written as poems — not as political, philosophical, aesthetic or musical displays. But poets are sensitive to the challenge ‘what is the moral justification of poetry?’ because they are so conscious of the intrinsic goodness of poetry.²⁷

この文脈の揶揄の対象はイギリス詩の伝統的感覚であり、否定される「詩の本質的善」はイギリス詩の道徳的価値である。*Epilogue*において強調される「詩的真実への意志」としての「思想的善」は、この道徳的価値を否定することによって発見された新しい善である。しかしこの新たな善も一定の道徳的判断に基く方向性を含むことを否定できず、その意味で善の概念に依存する。ライディングはその *Collected Poems 1938* の序文において詩と善の直接的関係を確認する。

To live in, by, for the reason of, poems is to habituate oneself to the good existence.²⁸

「善なる存在」は確かに詩的真実を追求する姿勢を示すといえるが (*Selected Poems 1970*²⁹ の序文においても同じスタンスが確認される)、この姿勢と道徳的価値とは無関係であるとはいえない。これは、*Epilogue* の文脈において道徳性と善の両立は不可能であるにも拘らずある判断が善の概念の選択に示され

た事とは必ずしも同じ感覚によるものではない。

グレイヴズ／ライディング批評における道徳的要素はグレイヴズの批評意識を反映すると考えてよい。それはライディングの批評原理とは相反するにも拘らずイギリス詩固有の力強い具体性と審美的価値を支える感覚である。A *Survey of Modernist Poetry*において詩が常に一定の「優美さと洗練」³⁰を伝え得るとするアーノルド的理解は、グレイヴズの反モダニスト的感覚の表明と解釈し得る。優美と洗練は「人間性の高揚」(“human uplift”)³¹あるいは究極的に善と仮定し得る道徳的価値である。ライディングの原理と拮抗する文脈におけるこの価値への言及は従って常に弁解的であり明快ではない。

It is always important to distinguish between what is historically new in poetry...and what is intrinsically new in poetry...³²

ここには明らかに、条件付きではあれ歴史的価値が認められるというモダニスト批評における誤謬が見られるが、それはむしろ、モダニズムがイギリス詩の感覚から得たインパクトであると考えられる。ライディング批評に存在する善の概念はこの意味で反モダニスト感覚の痕跡と仮定し得る。

*Epilogue*はマヨルカ時代におけるグレイヴズ／ライディング批評の総決算として位置づけられる。共同執筆による両者の批評活動は*Epilogue* III (1937)において終了する。ライディングとの別離後、グレイヴズは批評作品としては1940年に、アラン・ホッジ (Alan Hodge) との共著によって *The Long Weekend* を世に問うまで他に批評意識を明らかにすることはない。ライディングの場合はこの事情と異なり、1938年、単独編集により*Epilogue* IVの体裁を装う*The World and Ourselves*を刊行する。(この時点では*Epilogue* Vの出版も予定された。)³³本書におけるグレイヴズの寄稿はいわば形式的なものに過ぎずその声は目立つものではない。これは30年代ヨーロッパ社会の混乱と芸術的危機に関して65人の知識人からの書簡を集成する形態を取りながら、

実際は*Epilogue*批評の補遺としてのライディング自身の批評原理を独断的に展開したものと見るべきである。

I have invited a number of people to state their own attitude to the unhappy outer situations of our time. The statements I have used as *my* texts, and *my* starting-point. (Italics mine)³⁴

「不幸な外部世界の状況」は時事的にはスペイン内乱への言及である。この物理的状況はライディングの批評意識に刺戟を与えたとしてもそれは方便として利用されたに過ぎない。社会的意識はライディングにおいては本質的に重要ではない。内外の世界の峻別は外部的価値に対する内部的価値の特権的、絶対的優位を強調することにあるだけでなく、その価値が歴史性を超越するとする仮定を証明しようとする意図に基く。

To be chaste in the quality of our [*i.e.* of the inside people] interest in worldly circumstances; to keep clean our sense of difference between the temporalily and the permanently significant.³⁵

この姿勢はモダニスト批評の芸術的エリティズムと同質でありこの感覚の限界は1939年におけるライディングのあらゆる創作活動の中断に帰結する。芸術的エリティズムの強調は、ライディング批評における行詰りであるのみならずモダニズムの限界を示唆する感覚であるともいえる。*Epilogue*の調子はこの意味では常にモダニスト批評と軌を一にしたわけではない。歴史性に対する明快な否定はモダニズム文学における曖昧な姿勢とは対比的でさえある。イギリスモダニズム文学において観察される歴史的価値は一種の幻影であり、真実の価値はこの幻影を超える状況において認識され得るというテーマが見られる。ジョイスのヒーローにとり歴史性は悪夢であり、それを超克することがそのオブセッ

ジョンである。

— History, Stephen said, is a nightmare from which I am trying
to awake.³⁶

スティープン・ディーダラスの見る歴史という悪夢は宗教的文脈におけるものであり否定の姿勢は必ずしも明確ではない。Epilogueにおいて否定される歴史性は相対的、観念的価値を有する一切の現象を含む。それを排除したものが真実であり、それが絶対的詩的価値であるという以外は他の用語による定義を拒むというリゴリズムを有する。Epilogueにおける唯一の肯定的価値はこの詩的純粋性のみであり、従ってモダニズム文学の総合芸術的創作感覚を是認しないことは明白である。さらに典型的には批評的価値の詩的価値に対する従属性が明確な論理的帰結として示される。批評は創造的見解ではあり得ず常に判断の次元を超えるものではない。批評をほぼ創作と同価値と見るモダニズム思想は、文学作品の社会的価値を認識し、その表現を詩人の使命とする立場においてはその矛盾はほとんど無視し得る。事実、パウンドの批評活動をその適例としてモダニズム文学の批評活動は例外なくその重要性を認識したといえることができる。この意味においてはEpilogueの思想は部分的にはモダニスト理論と異なる感覚を有することを軽視すべきではない。Epilogueにおける反モダニストの特質はその道徳的価値への言及に見出される。パウンドがロンドン詩壇における活動においてフランス象徴主義からの離脱を試みたにせよ、この思潮がモダニズムの基本的感覚を補強したことは重要な事実である。フランス象徴主義の典型的姿勢はその特権的意識と反社会性にある。それは詩の芸術的特質のみを重視し、社会的、道徳的価値に言及することはない。むしろそれらについては言及すべきではないとする姿勢がある。これは第一義的には、19世紀における道徳的芸術観、即ち芸術と文学は社会的善に貢献すべきである、とする態度に対する反動と解釈できる。象徴詩の脱日常的調子、倦怠感はこの姿勢

を典型的に示す。モダニスト文学は基本的にこの感覚を継承し道徳的世俗的価値を否定する傾向を示す。*Epilogue*における善と詩的価値との関係に対する肯定的判断はこの状況において特別の意味を有する。即ち、*Epilogue*の根本的テーゼとしての純粹原理において善が詩的価値と近似するものとして認識されることは*Epilogue*批評の新しい方向を示唆する。

The pursuit of social morality is not the pursuit of poetry... If it is a question doubting the goodness of poetry because it leaks, functionally, moralistic stress, then, against this doubt, we assert that poetry, even because it is without moral admixture, is the extreme of goodness.³⁷

実際には道徳的特質を帯びることがない善の概念を思念することは不可能であるとすれば、善の価値が詩的価値に近似するとする仮定は重要な認識である。上記引用部分はライディング、グレイヴズ、ハリー・ケンプ (Harry Kemp) による共同執筆として示されるが、この批評意識におけるグレイヴズの影響は顕著であると考えられる。モダニスト理論においては善の観念は存在せず、それは*Epilogue*批評においてはイギリス詩における根本的感覚としてグレイヴズによって主張されたと推測し得る。*Epilougue*の特質はモダニスト理論に対する同調と矛盾を混在させたところに在る。芸術的エリティストの視点はライディングの思想を典型的に反映する。グレイヴズの批評意識は、モダニスト理論のエチュードのレベルに終始しその感覚を自らの体質と化することは終らない。*Epilogue*はこの意味においてモダニスト批評のディンプリンに内在する曖昧さを部分的に解決し、かつ、その理論的限界を自ら露呈したといえる。

NOTES

- 1 Robert Graves and Laura Riding (eds.), *Epilogue I*, (The Seizin Press, 1935) p.145
- 2 Laura Riding, "Foreword" to *Collected Poems 1938* (Carcamet. 1980) p.407.
- 3 *Epilogue I*, pp.1-3.
- 4 *Epilogue I*, p.61
- 5 *A Survey of Modernist Poetry* (Heinemann, 1927) p.274
- 6 *Epilogue II* (1936), p.149
- 7 Laura Riding, "Preface" to *Selected Poems* (Faber, 1970) p.15
- 8 Michael Bell, *The Context of English Literature* (Methuen, 1980) p.56
- 9 T.S. Eliot, *Collected Poems: 1909-1962* (Faber, 1963)
- 10 *To the Lighthouse* (Oxford University Pr., 1992) pp.180-81
- 11 *Epilogue III*, p.19
- 12 Laura Riding, "Foreword" to *The World and Ourselves* (Chatto and Windus, 1938) p.ix.
- 13 *Epilogue I*, pp.152-3
- 14 Laura Riding, *Anarchism Is Not Enough* (Jonathan Cape, 1928) p.101
- 15 *The Function of Criticism* (1923)(Faber, 1961) pp.29-30.
- 17 *Epilogue I*, p.153
- 18 *A Survey of Modernist Poetry*, p.172
- 19 *A Survey*, p.178
- 20 *Tradition and the Individual Talent* (1919)(Faber, 1961) p.17
- 21 "Modernism...setting itself the impossible task of individually but not individualistically creating a new classicism." *A Survey*, p.270
- 22 *A Survey*, p.277
- 23 *Epilogue I*, p.146
- 24 *Epilogue I*, p.148
- 25 *Epilogue III* (1937), p.43
- 26 *Epilogue III*, p.44
- 27 *Epilogue III*, p.43
- 28 (Carcamet, 1980), p.413
- 29 Cf. "In my preface to the collected edition of my poems [*i.e.* *Poems 1938*] ... I spoke of poetry as being the actual process of realizing 'the good existence,' described, itself, as 'poetry positive, all of truth': there was an ultimate of perfect truth to reach, and poetry was the way." (Faber, 1970) p.14.
- 30 "Poetry is seen first of all as supplying an elegance and refinement..." *A Survey*, p.161
- 31 *A Survey*, p.160

EPILOGUE: Its Modernist Criticism and Theoretical Limitation

- 32 *A Survey*, p.163
- 33 Cf. "I hope soon to be able to renew the original programme [*i.e.* the culmination of the literary series of *Epilogue*] with *Epilogue V.* " "Prefatory Note" to *The World and Ourselves*.
- 34 *The World and Ourselves*, p.x.
- 35 *The World and Ourselves*, p.520
- 36 James Joyce, *Ulysses* (1922) (The Bodley Head, 1991) p.40
- 37 *Epilogue* III, p. 44